

<祇園祭>

(1) 起源

かつて、夏には暑さのために体力が低下し、衛生状態も良くなかったので、腐敗や虫が媒介する菌などによって、一夏を無事に越すことは大変な事であった。そのため、夏を無事に過ごせることが念じられ、宮中で行われる夏越の大祓はその一例である。

平安京では、863年（貞観5年）に神泉苑で初の御霊会（ごりょうえ）が朝廷の主催により行われた。御霊会は疫神や死者の怨霊などを鎮め、なだめるために行う祭礼で、疫病などは恨みを現世に残したまま亡くなった人々の怨霊の祟りであると考えられていた。しかし、その後も疫病の流行が続いたため、牛頭天王を祀り、御霊会を行って無病息災を祈念した。

その後、864年の富士山大噴火や869年の貞観地震などが起こり、全国的に社会不安が深刻化する中、全国の国の数を表す66本の矛を卜部日良麿が立て、その矛に諸国の悪霊を移し宿らせることで諸国の穢れを祓い、神輿3基を送り、薬師如来を本地とする牛頭天王を祀り、御霊会を執り行った。この869年の御霊会が祇園祭の起源とされている。(Wikipedia)

(2) 祇園という名称

祇園という名称の由来は、日ユ同祖論者の間ではシオン“Zion”の丘と言われている。シオンの丘は、アブラハムが息子イサクを犠牲にしようとしていた場所である。確かに、八坂神社の背後は山であるものの、平安京の風水的には水を司る青龍であり、祇園の場所も平地だから、丘には相応しくない。

それよりも、エデンの園にあった川の名称の方が相応しい。エデンの園はピシオン川（多量の）、ギホン川（外へ流れ出る）、ヒデケル川（チグリズ）、プラス川（ユーフラテス）の水路から水を引いた場所にあった。

チグリズとユーフラテスは知られているが、ピシオンとギホンに相当する川は、現在は見られない。しかし、ランドサットによる高解像度画像で、クウェートとバスラ付近にある砂利の堆積跡がクウェート川で、それがピシオン川に相当すること、また古代の国クシュシュの主要な川で、現在は干上がっているカルン川がギホン川に相当することが判明したとされる。

ラテン系言語のように、ギホンの発音から“h”を抜けばギオンとなる。そして、ギホン川はクシュシュの土地全部を取り巻いており、ノアの洪水で世界が水に覆われていたイメージに重ねられる。

また、ギオンがギホン川の象徴ならば、鴨川から祇園の東端に至るまで象徴的に川ということになり、東端にある八坂神社が水を司る青龍に相当するのも納得できる。



<http://www.kit-net.ne.jp/wonder/kyoto.pdf#search=%27%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%B8%82+%E5%9C%B0%E5%9B%B3%27>

到達する八坂神社（の後ろの山）はアララト山に相当し、そこから現在の人類の繁殖が始まった。八坂は弥栄（いやさか）であり、繁栄を意味する。そして、大洪水後に人類の繁栄を契約したのは聖書に於いては“YHWH＝ヤハウエ”だから、八坂＝弥栄＝YHWH が人類を繁栄させる契約をした、となる。（方舟で救われたノアの家族は8人で、これもまた、8＝ヤー＝YHWH となる。）

(3) シュメールとの関わり

ここまでは聖書の話だが、創世記に於いて、“YHWH” は人類を創造したにもかかわらず、人類の行いが悪いから大洪水で滅亡させようとしたものの、ノアの方舟で生き残った人類に対して「産めよ、殖えよ、地に満ちよ」と命じた。これでは、神として自己矛盾している。そこで、この話の元を辿るとシュメールに行き着く。比較してみよう。（主に Wikipedia より。）

・創世記

神は地上に増えた人類の墮落を見て、洪水で滅ぼすことを、神と共に歩んだノアに告げ、方舟の建設を命じた。方舟を完成させると、ノアは妻、3人の息子とそれぞれの妻、そしてすべての動物のつがい方を方舟に乗せた。そして、その時が来た。大洪水は40日40夜続き、地上に生きていたものを滅ぼした。水は150日の間、地上で勢いを失わなかった。その後、方舟は第7の月の17日にアララト山の上に停まった。

40日後、ノアはカラスを放したが、地上の水が乾くのを待って、出たり入ったりした。ノアは鳩を放したが、地上に止まる所が見つからなかった。ノアの下に帰って来た。更に7日後、ノアは再び鳩を放すと、鳩は夕方になってノアのもとに帰って来て、くちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上から引いたことを知った。ノアは更に7日待って鳩を放すと、鳩は帰って来なかった。

ノアは完全に水が引いたことを知り、家族と動物たちと共に方舟を出た。そ

ここに祭壇を築き、焼き尽くす献げ物を神に捧げた。神はこれに対して、ノアとその息子たちを祝福し、ノアとその息子たちと後の子孫たち、そして地上の全ての肉なるものに対し、すべての生きとし生ける物を絶滅させてしまうような大洪水は、決して起こさない事を契約した。神はその契約の証として、空に虹をかけた。

・ギルガメシュ叙事詩

神エア（＝エンキ）が葦の壁を通じてウトナピシュティムに語った。「葦の小屋よ聞け、壁よ察せよ。ウバルトウトウの子、シュルツパクの人よ。家を壊し、舟を造れ。持物をあきらめ、お前の命を求めよ。品物のことを忘れ、お前の命を救え。すべての生きものの種を舟に運びこめ。お前が造るべき舟は、その寸法を決められたとおりにせねばならぬ。その幅と長さとを等しくせねばならぬ」7日目に舟は完成した。

大洪水が起こると、ウトナピシュティムは全財産、生きもの、家族、身よりの者、職人たちをすべて舟に乗せた。すると、6日と7夜、大洪水となった。7日目になると、大洪水はおさまった。空はまったく静かだった。そして、地上のすべての人間は粘土に変わっていた。見わたす限り、平らになっていた。

天窓を開けると、光がウトナピシュティムの顔にさした。彼はうなだれ、座って泣いた。舟はニシル山に辿り着き、6日間、ニシル山に停まっていた。

7日目に、ウトナピシュティムはまず鳩を放した。鳩は休み場所が見あたらずに戻って来た。次に燕を放したが、同じだった。その次に大鳥を放すと、水が引いていたので、餌をあさり、帰って来なかった。そこで、彼は山頂に神酒を注ぎ、神々に犠牲を奉げた。

・シュメールの洪水神話

「壁のかたわらで、私（＝神エア）はお前に話そう。私の言うことを聞きなさい。私の教えに耳を傾けなさい。我々の……により、大洪水が聖地を洗い流すだろう。人類の種を絶やすために……。これが神々の集会の決定であり、宣言である。」……あらゆる嵐、しかも甚だ強大なのが、一束になって襲ってきた。同時に、大洪水が聖域を洗い流した。7日と7夜、大洪水が国中を洗い流し、大舟は嵐のために大波の上でもてあそばれた。その後、太陽神ウツが現れ、天と地を照らした。ジウスドラは大舟の窓を開いた。英雄ウツは光を大舟の中に差し込ませた。王ジウスドラはウツの前にひれ伏した。

更に、これらの元が次の話である。

・主エンキの御言葉

その夜、エンキはジウスドラが寝ている葦の小屋へこっそり行った。エンキとの誓いを破ることなく、エンキは葦の壁に向かって言った。「葦の小屋よ、私の指示に従うのだ！あらゆる都市に大災害が襲い掛かる。それは、人類とその子孫の破滅となる。さあ、私の言葉に耳を傾けるのだ。家を捨て、船を造れ。財産を一蹴し、命を守るのだ！その設計図は、石板に記されている。私はそれ

を、小屋の側に置いておく。船は隅々までしっかり覆うのだ。船は様々な方向に回転できるようにし、水の殺到を乗り切るのだ！7日間で船を造り、その中へ親類を集めよ。食糧と飲み水を山積みにし、家畜も連れて行くのだ。その後、指定された日に、お前に合図が送られる。私が任命した船頭が、お前のところへやって来る。その日、お前たちは船に乗り込み、大洪水に備えるのだ。恐れることはない。その船頭が、安全な場所へお前たちを導く！」

ジウストラはエンキの声に跪き、
「我が主よ、お顔を見せて下さい！」
と叫んだ。エンキは

「私はお前にではなく、葦の小屋に対して喋ったのだ。エンリルの決定により立てた誓いに、私は縛られている。もし、お前が私の顔を見たら、お前は他の者たちと同じように死ぬことになる！さあ、葦の小屋よ、私の言葉に心を留めるのだ！その船の目的、アヌンナキのことは黙っておくのだ。尋ねられたら、こう言うのだ。『主エンリルが主エンキに対してご立腹になられた。私はエンキ様のお住まいへ航海して行く。そうすることにより、エンリル様のお怒りが収まるかもしれない』と」

声が聞こえなくなると、ジウストラは壁の後ろへ回った。そこには、石板が置かれており、船の設計図が描かれていた。彼は、自分が聞いたことを理解した。そして、エンキから言われたように船を造り、5日間で完成した。集まってきた人たちに対して、主エンキのお住まいに行きたい人がいたら一緒に連れて行こう、と告げたが、応じたのは何人かの職人だけだった。

6日目に、“大いなる水の主”ニナガルがやって来た。彼はエンキの息子で、航海士として選ばれた。彼はヒマラヤ杉の箱を持っていた。そこには、エンキ、ニンフルサグ、ニンギシュジッダによって集められた生物の生命エッセンスと卵が入っていた。

「エンリルの憤怒から隠し、地球が望むなら、命を復活させるために！」
とニナガルはジウストラに説明した。こうして、すべての獣たちのつがい船に隠された。大洪水が待ち受けられたのは7日目、120番目のシャルだった。大洪水が目前となったのは、ジウストラが10シャル目の歳のことだった。そして、崩壊が迫って来たのは、獅子の星座の位置であった。

大洪水の数日前、地球はゴロゴロと鳴り、天ではニビルが燃えるように赤く輝いた。そして、日中に暗闇が広がり、地球はニビルの重力に揺り動かされた。夜明けの輝きの中、水平線から暗雲が湧き起こり、朝の光は死の影に覆われたようだった。それから雷鳴が轟き、稲妻が空を照らした。

「出発だ、出発だ！」
とウツが合図を送った。“天の船”が出発し、激しい閃光がニナガルによって目撃された。

「ハッチを閉じろ！」
とニナガルがジウストラに命令した。その後、何千もの雷に匹敵する轟音と共に、南極の氷床が滑り落ちた。と同時に空に届かんばかりの高波が発生し、大

地を次々と飲み込んで行った。そして、アブズ、エディンへと達し、シュルバクのジウストラの船も飲み込まれた。

その日の終わりまでに、水は大地のほとんどを飲み込んだ。地球の周りを周回していたアヌナキは、その様子を見て呆然とした。ニンフルサグとイナンナは嘆き、悲しんだ。その猛威の光景に、アヌナキたちは挫かれていた。その後、天の水門が開き、空から豪雨が解き放たれた。7日間にわたって、上からの水と南極からの水が混ぜ合わされた。それから水の壁は限界に達し、猛攻撃は止んだ。空からの雨は、更に40昼夜続いた。高くそびえていた山々は、海に浮かんだ島々のようだった。水は行ったり来たりしながら窪地に集められ、次第に水位は低くなった。

40日後に、ニナガルが船をアラタの双子山（アララト山）に向け、帆を張り、船を導いた。ジウストラは待ちきれなくなり、乾いた土地を調べるため、鳥を放った。最初のツバメは帰って来た。次のカラスも帰って来た。最後に鳩を送り出すと、小枝をくわえて戻って来た。それにより、乾いた土地が現れたことを知った。

それから数日後、船は双子山の岩に停止した。

「我々は救済の山にいるのだ！」

とニナガルが言った。ジウストラはハッチを開けた。外は晴れて穏やかで、彼らは外に出た。ジウストラは

「主エンキを褒め称えよ！主に感謝せよ！」

と言った。彼は息子たちと石を集め、祭壇を築いて灯りをともし、香を焚きしめ、雌の子羊を生贄として捧げた。その時、地球の状況を把握するために、エンリルとエンキが空から“つむじ風（ヘリコプターに似た空中輸送機）”に乗って、アララト山に降りて来た。エンリルは、焚き火と肉が焼ける仄かな香りに当惑した。

「大洪水を生き延びた人間がいるのか！」

エンキと共にその方角に行ってみると、船、ジウストラ、祭壇、そしてニナガルの姿が見えた。ニナガルを見つけたエンリルの激高は、留まるところを知らなかった。

「地球人はすべて滅ぼすはずだった！」

エンリルはエンキに詰め寄り、素手で殴り殺すのも辞さないほどの構えだったが、

「彼はジウストラ、私の息子だ！」

とエンキは抗議した。

「お前、誓いを破ったな？！」

「私はジウストラにではなく、葦の壁に喋ったのだ。誓いは破っていない！」
と言い、エンキはエンリルにガルズの夢の話をした。

それから、ニナガルの知らせでニヌルタとニンフルサグが降りて来た。

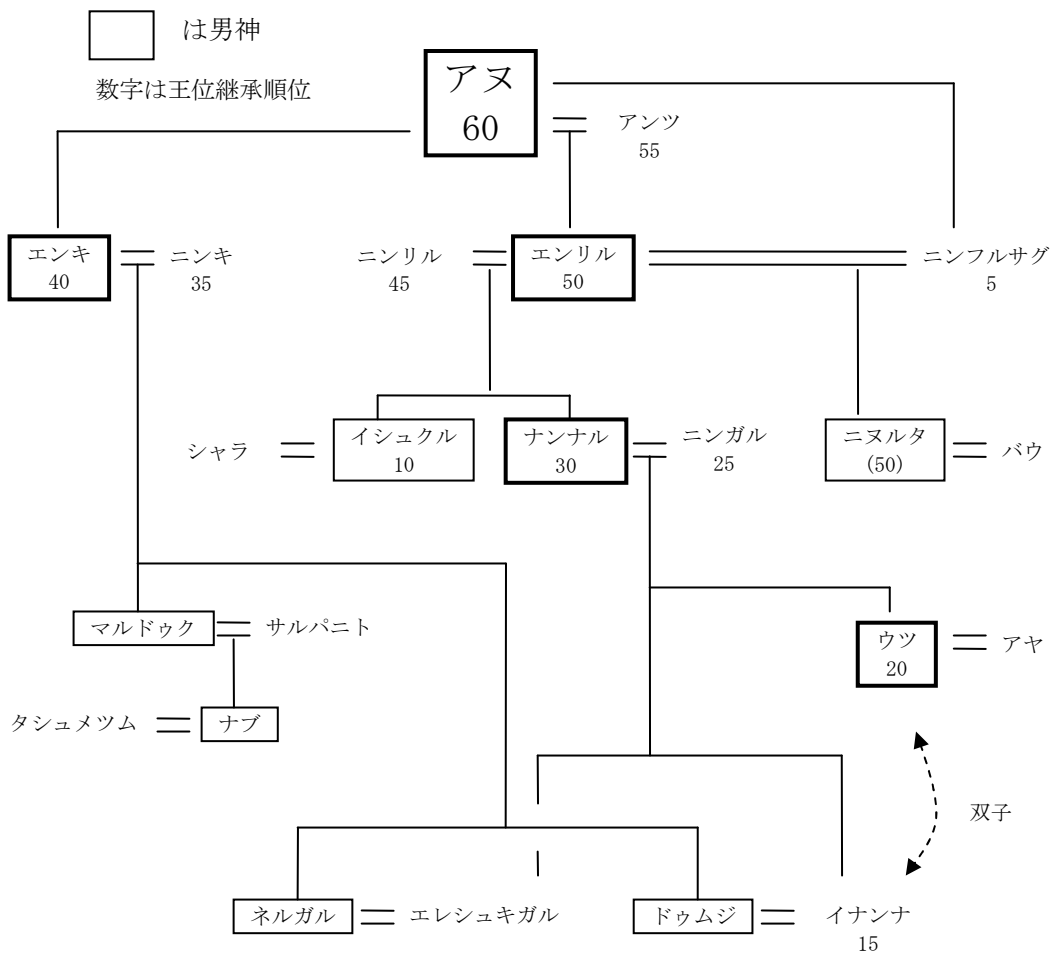
「人類の生存は、“万物の創造主”の御意思に違いありません」

とニヌルタが言った。ニンフルサグはアヌからの贈り物である水晶のネックレスに、

「人類の絶滅を二度と企てたりしません！」
と誓った。エンリルは態度を軟化させ、ジウスドラと彼の配偶者エムザラの手を取り、祝福した。

「実り豊かで増殖せよ！そして、再び地球を満たすのだ！」
こうして、“昔の時代”は終わりを告げた。

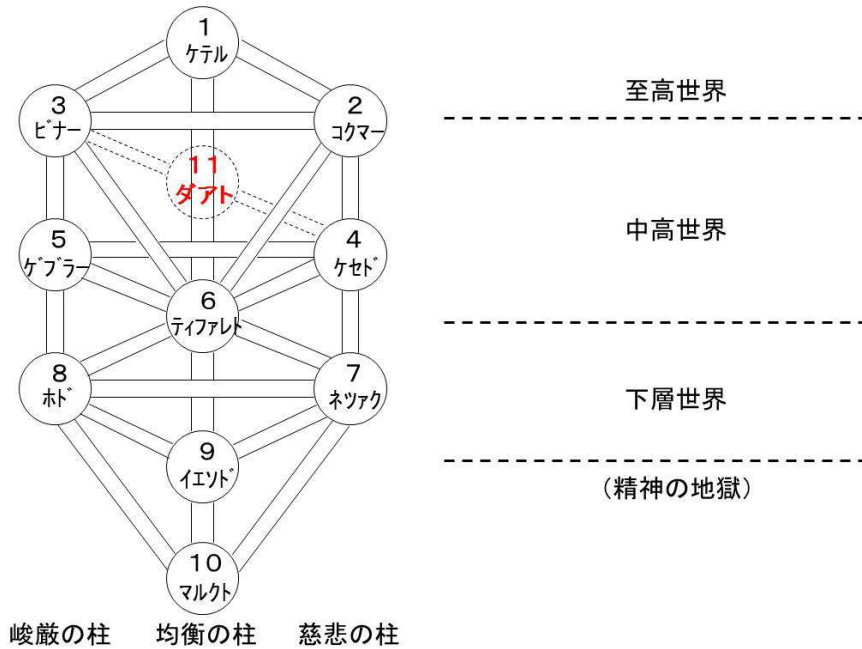
エンリルは最初から人類に対して好感が持てず、大洪水を機に、人類を助けないことを宣言した。しかし、エンキはエンリルとの約束を破り、自分と地球人女性の間にも生まれたノア＝ジウスドラに命じ、方舟を造らせ、自分の息子ネルガルを船頭として派遣した。また、大洪水は40日間続いたとされるが、40はエンキの王位継承数字である。救われたジウスドラを見て、エンリルは人類を赦した。良い龍や蛇に喩えられるのは、地球の主エンキである。



(4)カバラ

①山鉾

さて、祇園祭で繰り出す 33 隻の山鉾は、「生命の樹」に於けるセフィロトとパスの合計数である。



山鉾はアララト山に関連するが、神輿ではなく山車である。神輿は契約の箱アークであり、モーゼ以降の時代のことである。祇園祭で再現しているのはノアの方舟だから、アークが造られるよりも前のこと。しかしまた、方舟もアークと言う。それ故、山車は方舟アークを暗示する。

祭りの本来のメインは、八坂神社の神の御霊が神輿に遷され、巡幸することにある。この神輿は契約の箱アークの暗示である。エンキは自分の言葉を主の御言葉として、熟練筆記者のエンドウブサルに書き留めさせたが、それがモーゼの十戒の原型である。そして、十戒は契約の箱アークに収められた。

②八坂神社の祭礼とシリウス

八坂神社で祀られるのはスサノオである。(劔山本宮宝蔵石神社も。) スサノオは牛頭天王=シヴァ神でもあり、原型はイナンナである。それが青龍で、ノアの方舟に関連し、エンキに関わるならば、シリウスの暗示である。シリウスには、カバラ的にエンキをメインとしてイナンナが重ねられており、それが瀬織津姫であり、菊理姫であり、弁天様=イチキシマヒメであり、豊受大神だからである。(＜星の信仰＞)

この祇園祭の時期、エジプトのメンフィス地方ではナイル川の増水が始まり、シリウスのヘリアカル・ライジングが起きる。ヘリアカル・ライジングとは、太

陽が昇る直前に、ある天体が昇る現象のこと。つまり、太陽にエネルギーを送っているシリウス＝菊理姫・瀬織津姫＝縄文の神が、太陽＝天照大神＝弥生の神に先立って上昇する。

そして、メンフィスは、ピラミッドのあるギザの20キロ南に位置する。そのピラミッドは、エンキの息子ニンギシュジッタが設計した。また、メンフィスの守護神はプタハだが、プタハとはエンキのことである。

すなわち、いずれもエンキの関わりが濃厚である。それもそのはず、人類を大洪水から救った張本人は、地球の主エンキに他ならないからである。